

## 過去に追いつく

「医者は風邪を診ていない」という言葉があります。これは二重に真実です。悪い医者は風邪を診ないし、良い医者は風邪の外を診ています。どういうことでしょう。

悪い医者の場合。風邪は放っておいて治る病気ですが、悪い医者は商売っ気があります。効きもしない抗生物質を出します<sup>1</sup>。しかも処方は、決まって強力な第三セフェム系の抗生物質です。第三セフェム系というのは、たとえば腸内細菌用の抗生物質で<sup>2</sup>、そうであるがゆえにしばしば腸内細菌を皆殺しにし、飲んだ患者は数日後から下痢が始まります<sup>3</sup>。一部の患者は、それでも喜んで「風邪に抗生物質」を受け入れています。

良い医者も風邪を診ません。そればかりか薬も出しません。抗生物質だけでなくどんな「風邪薬」も全く効かないからです<sup>4</sup>。「風邪」を訴える患者を前にして、医者は何をしているのでしょうか。一つは風邪の隣の病気<sup>5</sup>ではないか、二つ目に「死に至る風邪」ではないか、を診ています。特に後者が大切です。

「死に至る風邪」とは何でしょう。風邪は放っておいて、数日で完治します。しかし「死に至る風邪」は風邪のようで、風邪ではありません。少し見た目が風邪に似ているだけで、風邪とは何の関係もありません。「風邪は万病のもと<sup>6</sup>」を言い換えているのでもありません。

「死に至る風邪」を医者が見抜けなければ、文字通り死が待っています。とても恐ろしく、具体的に次のような七つの病気があります。

- ① 副腎不全 ②糖尿病性ケトアシドーシス(劇症型の糖尿病) ③急速進行性糸球

---

<sup>1</sup> 風邪に限らず、5万種あるどんなウイルスにも、抗生物質はまったく効かない。抗生物質はウイルスに使う薬ではなく、もっと大きなからだをしている細菌(ばい菌)や真菌(カビ)に使う。

<sup>2</sup> 第三セフェム系ではなく、たとえばペニシリン系の抗生物質ならまだ「上気道(のどや鼻や中耳)に繁殖しやすい細菌を考慮して」という口実が成り立つ。しかし、もともと「風邪を診ない」医者なので、抗生物質の違いにも注意を払わず「強ければ良いくらい」に思っている。しかし上気道の常在菌も理由なく殺すと、害がある。

<sup>3</sup> まるで風邪が消化器にも広がったように錯覚する。

<sup>4</sup> 「風邪薬」を飲むと、確かに効く気がする。気のせいではなく、症状を抑えてくれる(解熱鎮痛剤など)。でも残念ながら、病気を早く治す効果はまったくない。臭い物に蓋をしているのだ。風邪を治せばノーベル賞、と言われているほどである。わずかに漢方薬(葛根湯、麦門冬湯、桔梗湯、小青竜湯、麻黄湯、麻杏甘石湯など)には効果がある。

<sup>5</sup> 風邪なら、三大症状①鼻水、鼻閉 ②のどの痛み(嚙下痛) ③咳、痰 のすべてあるいは二つがある。逆に風邪の近隣疾患は、たとえば、鼻水の出る肺炎なんてほとんど存在しないし、咳の出る溶連菌性咽頭炎もほとんどない。のどの痛い副鼻腔炎もない。症状を診れば、風邪と風邪もどきはおおよそ見当がつく。この他、高頻度の風邪近隣疾患には、ウイルス性鼻炎、伝染性単核球症、ウイルス性咽頭炎、気管支炎、喘息、感染後咳嗽、アトピー咳嗽、鬱血性心不全、球感覚、菊池病、百日咳、クラミジア感染などなどある。

<sup>6</sup> 医学的には?? 唯一、七つの死に至る風邪の内の⑥ウイルス性心筋炎が「風邪は万病のもと」に近いが、このウイルス性心筋炎も前述の風邪症状は乏しく、風邪から発展してくるわけではない。頻脈や血圧低下で見当をつける。

体腎炎(劇症型の腎炎) ④細菌性心内膜炎(虫歯菌が心臓に巣を作る<sup>7</sup>) ⑤白血病(特に急性骨髄性白血病<sup>8</sup>) ⑥心筋炎(心臓のウイルス感染)や劇症肝炎 ⑦鳥インフルエンザ

どの病気も患者は「風邪」の顔をして歩いて来院しますが、帰宅するわけにはいきません<sup>9</sup>。病名を見ただけでも七つの恐ろしさが伝わってきますが、気になるのが最後の鳥インフルエンザです。どんな病気でしょう。実は毎週のように日本でニュース<sup>10</sup>になっているのですが、新型コロナの影響もあって、人々の注目を集めることはありません。三つの型の鳥インフルエンザが存在します。

<sup>7</sup> 七つの「死に至る風邪」の中で、これだけは抗生物質で治療する。ただし悪い医者御用達の第三セフェム系ではない(第一セフェム系+ペニシリン系+アミノグリコシド系の三剤併用が基本)。しかも抗生物質開始の前に、必ず血液培養のための採血をする。前医で不用意に「風邪に抗生物質」が投与され、そのため血液培養の採血が行えず、治療の開始が三日間(第三セフェム系が体内から消えるのを待つ)遅れることがある。

<sup>8</sup> 水泳の池井璃花子選手がかかって、世間に名が知れた。

<sup>9</sup> 10年間の私の外来で、各①2人 ②3人 ③1人 ④2人 ⑤(1人 慢性骨髄性白血病) ⑥3人 ⑦0人 決して多くはないが、ポツポツ時々、来院する。

<sup>10</sup>

## 鹿児島県出水市で鳥インフル ツルねぐらの水から一環境省

2020年11月13日18時31分

環境省は13日、鹿児島県出水市で採取されたツルのねぐらの水から、高病原性鳥インフルエンザウイルス(H5亜型)が検出されたと発表した。自然環境下での検出は10月末の北海道に続き、今年2例目。

鳥インフル、香川で4例目 約1万羽殺処分

鹿児島大学と出水市が例年行っている調査で、今月9日にツルがねぐらとしている田んぼから水を採取し、13日に陽性と確認した。

環境省は採取地点から半径10キロ圏内を野鳥監視重点区域に指定。今後、鹿児島県などと協力し、周辺で死亡している野鳥のウイルス保有状況などを調査する。

第一の鳥インフルエンザ。文字通り鳥のインフルエンザで、人間には直接関係ない。しかし次の第二の鳥インフルエンザとのつながりから、渡り鳥が持ち込む鳥インフルエンザでさえニュースになる（前述）。養鶏場の鶏がこの第一の鳥インフルエンザに感染すると、その養鶏場のすべての鶏が殺処分になる。ただ、この第一の鳥インフルエンザは獣医の守備範囲。

第二の鳥インフルエンザ。鳥と濃厚接触している人間に、稀に第一の鳥インフルエンザがうつることがある。世界で毎年50人くらいが感染し、なんとその半数が死亡する。非常に恐い感染症だが、幸いにも人から人には感染しない。患者数がとても少ないので人々の関心は無い。でもこの第二の鳥インフルエンザが、次の第三のインフルエンザに関連する。

第三の鳥インフルエンザ。これこそが「死に至る風邪」七疾患のひとつ。ただしまだ、この世には存在していない。未来の病気である。近い将来必ず、第二の鳥インフルエンザウイルスが、感染した人間の体内で進化し人から人への感染性を獲得、第三の鳥インフルエンザに変貌して、世界中に大爆発すると予想されている。だとしても、なぜ未来の病気を医者は警戒しているのか。

医者たちの杞憂ではありません。100年前のスペイン風邪も、この第三の鳥インフルエンザのひとつと考えられています。スペイン風邪<sup>11</sup>では、世界で5億人、日本で2千万人(国民の4割)が感染し、世界で数千万人、日本で40万人が死亡したと推測されます。私自身ある医師会の勉強会で、スペイン風邪の脅威は過去のものではないことを話したばかりでした<sup>12</sup>。

もし新型の第三の鳥インフルエンザの大流行が始まって、患者は鳥インフルエンザの名札をつけて病院にくるわけではありません。おかしな熱病が流行り始めたら、医者はたくさんの病名のリストの中に新型の鳥インフルエンザを加えるべきです。鳥インフルエンザが世間に知られるようになってからでは、手遅れになります。医者は「普通の風邪だ」と診断してはいけません。これが「死に至る風邪」の七番目に鳥インフルエンザがある理由です。

新型コロナが広がり始めた2020年2月、私はこの第三の鳥インフルエンザと同等クラスの新伝染病が始まったと覚悟しました。こんな緊張感は、医者になって初めてのことです。

それから9か月間、新型コロナに関して様々なことが連日報じられています。私もこの場を借りて前二回、PCR検査の精度に関して突っ込んだことを書きました。ちょっと専門的すぎるかなと思いました。しかし外来で発熱した患者と話していると、最近は多くの方がPCR検査の精度をそこそこ理解しています。陽性ならかなりコロナらしい。しかし逆に陰性

---

<sup>11</sup> 正確には風邪ではなく、当時新型の鳥インフルエンザ。

<sup>12</sup> 私の主題は、一度は激減したものの21世紀になって再び日本で増え始めている梅毒だったが、感染症の脅威は過去のものではない例としてスペイン風邪を取り上げた。

と出ても、コロナではないと言い切れない。コロナに限らず医学の多くの事実は白黒二択ではない、と人々は学んでいます。先週、体操の内村航平選手がPCR陽性になった時も、本人も世間も「偽陽性」という摩訶不思議な出来事をすんなり受け入れたようにみえました。短い間に時代は変わったと実感します。

「インフルエンザの陰性証明書がほしい」<sup>13</sup>という人たちが病院に来たのは、つい一年前までです。医学的事実のすべては確率であることを人々は理解し始め、きっともう少し経てば、ニュース解説にベイズ<sup>14</sup>が登場するかと思うほどです。

これは医学的事実でなく私の印象ですが、新型コロナ<sup>15</sup>は当初の予想と違ってスペイン風邪ほどにはならないだろうと予想します。新型コロナの感染力はインフルエンザ以上です。結核や麻疹並みかもしれません。しかしそれでも日本に限ればスペイン風邪ほどの犠牲者は出ず、これから数年間で数万人程度<sup>16</sup>の死者数にとどまるのではないかと楽観しています。理由は、「三密」に代表される人々の生活の変化です。新たな治療法でも来年のワクチンに期待しているからでもありません。日本人はスペイン風邪でマスクの習慣を学びました。三密の中身はスペイン風邪の前にも言われていたことですが、「三密」という言葉の力が人々の生活を変えていくことに期待しているからです。

「風邪を治せばノーベル賞」の医学レベルが、急に新型コロナの治療だけ進歩するとは思いません<sup>17</sup>。先輩格のインフルエンザの治療薬でさえ、実はその実力は微々たるものです<sup>18</sup>。ワクチンもこれから何度も何度も失敗すると考えるのが常識でしょう<sup>19</sup>。

---

<sup>13</sup> インフルエンザ陰性の証明が原理的に不可能であることは、前回書いた。鼻の迅速検査(抗原検査)には偽陰性が多いので、肯定力はまあまあとしてインフルを否定する力は弱い。「がん陰性の証明」なんて、夢のまた夢である。せいぜい「1 cm以上の大きさの癌は見あたらない証明」が精一杯だが、1mm大の癌も百万個の癌細胞を含んでいる。

<sup>14</sup> 前回書いた、二百年前の英国の統計学者。医学生が最初に学ぶ診断学の基本中の基本「ベイズの定理」を生み出した。

<sup>15</sup> COVID-19

<sup>16</sup> 2020/11/14 現在 1900 人。本格的流行はこれから、という思いに変わりはないが、一方でスペイン風邪の 1/10 程度の犠牲者にとどまると期待している。

<sup>17</sup> 現行の新型コロナの治療とは、ECMO(人工心肺)も含め、自分の力で治す間の時間稼ぎが中心。もちろんこれは決して無意味ではない。

<sup>18</sup> タミフル、イナビル、ラピアクタ等 7 種あるが、いずれも一週間程度のインフルエンザの有病期間を、平均で 0.7 日縮めているにすぎない。しかもこれは今までの臨床試験の結果から、二千年来の漢方薬の麻黄湯(インフルエンザの正体は不明でも、インフルエンザという病気そのものは太古からあったと想像される)の効果と同等である。ただし「0.7 日」は平均値なので、劇的に効く人もいるが反対に全く効かない人もいる。つくづく医学は不公平である。インフルエンザで効果が出せず新型コロナの治療に移動してきた「流れ者」のアビガンが(なぜだか安倍元首相やテレビによく出る岡田晴恵教授に好かれている)、仮に新型コロナに効いたとしても、それは残念ながら「微力」にとどまるだろう。私はアビガンの製造会社である富士フィルムの元社員だが、それでも最良にできない。

<sup>19</sup> HIV もデング熱(毎年 1 億人が感染、2 万人が死亡。私も 2012 年にフィリピン実習で感染)も、同じ新型コロナの SARS (2002~2003 年)も、ワクチンは失敗。特に SARS の

私はいつも NHK の『100 分 de 名著』を録画して試しています。9 月はデフォーの『ペスト』<sup>20</sup>でした。いくらパンデミックつながりとはいえ 350 年前の英国のペストの話なんて、広げすぎだろうと油断したのですが、観始めてびっくり<sup>21</sup>。未知の伝染病に対して、人々の戦いが克明に描かれています<sup>22</sup>。日本なら江戸時代初期に相当しますが、それから 350 年の間に医学はとて進歩したはずなのに、未知の病気との戦い方は今も何も変わっていない、というのが私の実感です。

「何も変わらない」は誇張ではありません。「三密を避ける」という言葉は無くても、ペストがペスト菌でうつる細菌感染という知識が無くても、三密対策が有効であると当時の政府は推奨し、人々は実践していたのです。乏しい医学的知識であったことを加味すれば、驚異の善戦です。感染対策か経済優先かという極めて今日の問題でさえ、350 年前のロンドンで激論が交わされていました。現代の私達の苦悩は決して新型コロナのせいではなく、人間の普遍の歴史なんだとわかります。少しも新型コロナを恨むことはできません。家族の遺体に触れることもできずに葬る悲しみ、三密対策の緊張に耐えられず居酒屋で感染してしまう人、平然と犯罪に走る人、逆に困窮した人々を助けようとする人、現代中国のように力づくで流行を封じ込めようとする人、それから逃げ出そうとする人、その混乱ぶりは現代と何も変わらないのです。私たちはペストの診断と治療<sup>23</sup>、疫学対策は学んできたのに、社会は未知の病気への対応方法を何も学んできませんでした。

『ペスト』はたくさんの衝撃の事実を突き付けます。十分にコロナ対策をしているつもりだった私も、深く反省したことがあります。『ペスト』によれば、350 年前の市場で人々は、酢の入った壺にお金を一度つけてからやり取りしていました。人間が細菌を発見したのは、そのずっとあとの 19 世紀です。細菌の存在も知らないのに、酸に殺菌力があることを予見し<sup>24</sup>、貨幣を消毒して使っていたのです。迂闊だった私はさっそく翌日から、スーパーの買い物は現金でなく PASMO<sup>25</sup>で支払うようにしました。レジのドロアー(現金入れ)が”酢”で満たされるまで、止めるつもりはありません。やっと 350 年前に追いついた気がします。

---

ワクチンは、かえって感染性を高める逆効果に終わった。

<sup>20</sup> カミュの『ペスト』は 20 世紀の純粋な文学だが、17 世紀デフォーの『ペスト』は文学を超え、歴史あるいはルポルタージュ、さらに社会学、医学的記録といて良い。

<sup>21</sup> あわてて Amazon でデフォー『ペスト』を購入した。

<sup>22</sup> 文庫本で 453 頁

<sup>23</sup> ペスト菌が、ノミに噛まれてあるいは飛沫で人から人に感染。抗生物質のテトラサイクリンやニューキノロン系が極めて有効。死者は世界で年間数百人程度。

<sup>24</sup> ピロリ菌など一部の細菌を除けば、ほとんどの細菌は、酸やアルカリに弱い(実はピロリ菌も酸に弱い。ただ自分で隠れ家(ウレアゼ)を造り、人の胃袋の酸の中で生きている)。

<sup>25</sup> 関東地方の乗車運賃先払カード